

メッセージアウトライン サムエル記第一23:1～29

「仕切りの岩山」

[1-2]「『今、ペリシテ人がケイラを攻めて、打ち場を略奪しています』と言って、ダビデに告げる者がいた。ダビデは主に伺って言った。『行って、このペリシテ人たちを討つべきでしょうか。』主はダビデに言われた。『行け。ペリシテ人を討ち、ケイラを救え。』」

イスラエルの王サウルから逃亡中のダビデとその部下たちはアドラムの隠れ場に滞在中、ペリシテ人によるケイラ略奪の報を聞く。「ケイラ」はアドラムの数キロメートル南、死海の西岸より約30キロメートル西の地。「打ち場」は麦などの穀物の殻を取り除き、実を取り入れる作業ができる平坦な場所。収穫の直後、打ち場には穀物が積まれていた。ペリシテ人はそれを狙ってやって来たのである。この知らせがサウルにではなく、ダビデに知らされたのは人々が彼に期待していたことを示す。それでダビデは主なる神に伺ったところ、行って、ペリシテ人を討ち、ケイラを救えと、答えられた。これは彼とともにいた祭司エブヤタルの携えていた大祭司用の服エポデ(6)につけられていた「ウリムとトンミム」という主のみこころを伺う道具によって示されたのであろう。→出28:30、レビ8:8、民27:21

[3-4]「ダビデの部下は彼に言った。『ご覧のとおり、私たちは、ここユダにいてさえ恐れているのに、ケイラのペリシテ人の陣地に向かって行けるでしょうか。』ダビデはもう一度、主に伺った。すると主は答えられた。『さあ、ケイラに下って行け。わたしがペリシテ人をあなたの手に渡すから。』」

一度の主からの答えに、行動しないのは不信仰であると決めつけることはできない。恐れのある部下たちと行動してもよい結果は得られないであろう。それでダビデはもう一度、主のみこころを伺った。結果は同じであったが、主は「ペリシテ人をあなたの手に渡すから」とはっきり教えてくださった。

[5-6]「ダビデとその部下はケイラに行き、ペリシテ人と戦い、彼らの家畜を奪い返し、ペリシテ人を討って大損害を与えた。こうしてダビデはケイラの住民を救った。アヒメレクの子エブヤタルは、ケイラのダビデのもとに逃げてきたとき、エポデを携えていた」

ダビデは主のみことばに従って部下たちとともに出て行き、ペリシテ人と戦い、彼らを討ち、ケイラの住民を救った。

[7-8]「一方、ダビデがケイラに来たことがサウルに知らされると、サウルは、『神は彼を私の手に渡された。彼は扉とかんぬきのある町に入って、自分自身を閉じ込めてしまったのだから』と言った。サウルは、ケイラへ下ってダビデとその部下を攻

めて封じ込めるため、兵をみな召集した」

サウルとダビデ、同じイスラエルの神を信じる者であるが、サウルは不信仰と傲慢に陥り、ダビデ殺害の息を弾ませ、主のみこころにかなわない者となっていた。サウルは「神は彼を私の手に渡された」と、いかにも神が自分の味方であるように言うが、事実はそうではない。彼は自分の都合の良い時だけ神の名を用いるのである。サウルは今までに何度も悔い改めの機会があった。もし彼が心から自分の生き方を悔い改め、不信仰から立ち返るなら、主は別の幸いと平安と繁栄の道を備えてくださったであろう。主は悪者の滅びるのを望んでおられない。→エゼキエル18:23, 32、Ⅱペテロ3:9 聖書は、悪人は必ず死ぬと運命論を教えていない。→エゼキエル33:11 しかし、あくまでも心頑なにし、罪と悪の道に生きていくなれば、最後には主のさばきが臨むのである。

ダビデは羊飼いとしてユダの荒野をよく知っていたので隠れ場はいくつも知っていたであろう。それで荒野よりもケイラの町にダビデが入った方がサウルには好都合だったのである。彼は兵をみな召集し、ダビデとその部下を町に封じ込めようとした。

[9-12] ダビデは、サウルが自分に害を加えようとしているのを知り、主のみこころをエポデによって知ろうとした。(9) ダビデは「サウルは…下って来るでしょうか」、「ケイラの者たちは私と私の部下をサウルに引き渡すでしょうか」と主に伺うが、その結果は、「彼は下って来る」、「彼らは引き渡す」であった。(10-12)

ケイラの町の人々は、ペリシテ人の手から自分たちを救ってもらったのに、ダビデと部下たちをサウルに引き渡そうとする。これはノブの町で祭司アヒメレク一族がダビデによる反逆に協力しているとの疑いをサウルにかけられ、皆殺しされたことから、自分たちもそうならないようにとの思いと恐れからサウルの側に付こうとしたのであろう。

[13-14]「ダビデとその部下およそ六百人は立って、ケイラから出て行き、そこここと、さまよった。ダビデがケイラから逃れたことがサウルに告げられると、サウルは討伐をやめた。ダビデは、荒野にある要害に宿ったり、ジフの荒野の山地に宿ったりした。サウルは、毎日ダビデを追い続けたが、神はダビデをサウルの手に渡されなかった」

ダビデは主が示された答えにより、ケイラの町から出て行き、各地をさまよい、荒野や要害に宿ったりした。ここではダビデの部下がおよそ六百人となっている。22:2では約四百人となっているので、ダビデに従う者が次第に増加していることが分かる。これだけの人数が荒野をさまよいつつ、生活することは容易ではない。ダビデはこの期間に、人々を統率し、生き抜いていくすべも学んでいったのであろう。そして主なる神はサウルの追討にもかかわらず、決して彼らをサウルの手に渡されることはなかった。困難の中にあっても主は彼とともにいてくださり、助け、守ってく

ださるのである。

[15]「ダビデは、サウルが自分のいのちを狙って、戦いに出て来たのを見た。そのとき、ダビデはジフの荒野のホレシュにいた」

「ジフの荒野」はヘブロンとカルメルの間接地帯。ユダの山地と死海の間の岩石の多い地である。「ホレシュ」は草むらとか森という意味。ヘブロンは南約10キロメートル。

[16-18]「サウルの息子ヨナタンは、ホレシュのダビデのところに行って、神によってダビデを力づけた。彼はダビデに言った。『恐れることはありません。父サウルの手が、あなたの身に及ぶことはないからです。あなたこそ、イスラエルの王となり、私はあなたの次に立つ者となるでしょう。父サウルも、そうなることを確かに知っているのです。』二人は主の前で契約を結んだ。ダビデはホレシュにとどまり、ヨナタンは自分の家に帰った」

ヨナタンはいのちの危険の中にあるダビデを探し出し、やって来て彼を励まし、力づけた。通常であればヨナタンが王位継承者であるにもかかわらず、彼は神のみこころを知り、喜んで第二の地位に甘んじた。「父サウルも…確かに知っているのです」…嫉妬と狂気の奥にある、ダビデが次の王となるという本当の思い。「二人は主の前で契約を結んだ」…これは以前と同じ内容の契約であろう。→20:15-16
「ダビデはホレシュにとどまり、ヨナタンは自分の家に帰った」これが二人の最後の会見であった。もう彼らは二度と会うことはないのである。

[19-20] ジフの人々はサウルのところに行き、ダビデが隠れている場所を教えた。「エシュモン南、ハキラの丘」…詳しい場所は不明であるが、そこはホレシュであることは間違いない。そして彼らはサウルがそこに下ってくるならば、ダビデを引き渡すと言う。

[21]「サウルは言った。『主の祝福があなたがたにあるように。あなたがたが私のことを思ってくれたからだ。』」

ダビデ追討がことごとく失敗しているサウルのもとに、ジフの人々が朗報をもたらした。ダビデが潜んでいる場所の情報である。これを聞き、サウルは非常に喜んだ。誰も自分のことを思ってくれないと、疑惑と失意と被害者意識の中にあつたサウルに、わざわざユダの地から良い知らせを持って来てくれた人々がいたのである。サウルの王としての威信はまだ地に落ちていないというところか。しかし、彼にはこのような人々の声は寄せられるが、神からの声はもはや聞こえないのである。

[22-23] サウルはジフの人々に、ダビデは悪賢いとの評判だから、行って、詳しい情報を知らせてくれと言う。ダビデが足を運ぶ場所、だれがそこで彼を見たか、彼が潜んでいる場所、それらをよく調べて確かな知らせを持って来てほしいと。その結果を受けてサウルは彼らとともに行き、ダビデを捜し出すと言う。念には念を入れたことばである。

[24-25]「彼らはサウルに先立ってジフへ行った。一方、ダビデとその部下は、エシモンの南のアラバにあるマオンの荒野にいた。サウルとその部下はダビデを捜しに出て行った。このことがダビデに知らされたので、彼は岩場に下り、マオンの荒野にとどまった。サウルはこれを聞き、マオンの荒野でダビデを追った」

「エシモン」…固有名詞ではなく、荒れた所という意味。「アラバ」…エシモンの南からベエル・シェバの野まで続く乾燥地帯。「マオン」…ヘブロン南方約10キロメートルの地。ジフからは数キロメートル南で徒歩2時間ほど。高地にあるジフからはマオンの荒野を見渡せる。

ダビデとその部下たちはその時、マオンの荒野にいたが、サウルの軍がやって来るとの知らせを受けて、急遽その地の岩場に下った。

[26-27]「サウルは山の一方の側を進み、ダビデとその部下は山のもう一方の側を進んだ。ダビデは急いでサウルから逃れようとした。サウルとその部下が、ダビデとその部下を捕えようとして迫って来たとき、一人の使者がサウルのもとに来て、『急いで来てください。ペリシテ人がこの国に襲いかかってきました。』と言った」

「山」といっても長大な山脈ではなく、岩の連なる岩山であった。ダビデとその部下は死海側を、サウルたちはその反対側を並行するように移動していったのであろう。それは石を投げれば届くような距離であったかもしれない。もはや発見されるのは時間の問題で、絶体絶命の状況であったが、そこに主なる神の助けがあった。サウルのもとに一人の使者が来て、ペリシテ人の来襲を告げたのである。[28-29]「サウルはダビデを追うのをやめて帰り、ペリシテ人の方に向かった。こういうわけで、この場所は『仕切りの岩山』と呼ばれた。ダビデはそこから上って行って、エン・ゲディの要害に住んだ」

マオンの岩山がサウルとダビデの運命を分けた。道が一つしかなかったならば、ダビデは見つけられたであろう。しかし、岩山で仕切られ、双方が見えない状態で移動し、さらに突然のペリシテ人来襲の報も加わり、サウルのダビデ討伐は果たされなかった。。これは偶然のように見えるかもしれないが、そこに神の介入があったのである。主なる神は決してダビデをサウルの手に移そうとはされない。主は常にダビデとともにおられるのである。そしてダビデはエン・ゲディの要害に移動した

「仕切りの岩山」…ダビデとその部下とサウルとその部下がこの山の尾根を境に相対したことからこの名がつけられた。

「エン・ゲディ」…死海西岸に面した中央にある地。石灰岩地層で多くの洞穴や泉がある。エルサレムからは南東に約48キロメートル。

私たち信仰者も人生において、苦しみや試みを受け、絶体絶命の窮地に置かれることがあるかもしれない。しかし、主は信仰をもってより頼む者を決して突き放すようなことをなされない。主は常にともにいて、守り、導き、助け出してくださるのである。

詩篇 121 篇、ローマ 8:28-31